

巻 頭 言

医療DX推進の波

愛知県小児科医会 会長
津村 治男

COVID-19のパンデミックから3年近い年月が流れた。いきなり人との接触を避けるように言われ、仕事は在宅勤務、テレワークが推奨され、人との接触を極力減らす生活様式が求められてきた。対面での会議や講演会が大幅に減って代わりにWEBでの会議、講演が増えたが、それだけではなく、各種資料をメールやWEBから取得する機会が大幅に増えた。何の声かけもされないまま、一人きりでパソコンの前でコツコツと資料をダウンロードする日々が続く。厚生労働省、医師会、自治体からの重要な情報がICT (Information and Communication Technology) を介して届けられるが、その量は膨大である。例えば、愛知県医師会から配信されてくる「愛医通信」を一つとっても、直近1週間での5回の配信量を調べてみると、見出しの件数の合計は34件、PDFの総ページ数は597ページに及んだ。1ヵ月で2,500ページほどになる計算だ。その全てに目を通すのはもちろん大変なので、見出しだけを見て必要と思われるもののみ閲覧し、ダウンロードをするのだが、重要な内容を見逃すこともある。以前は、仲間が集まる会合での雑談の中で見逃していた情報に気づいたり、疑問が解消することがよくあったが今はその機会が少ないのを悲しく思う。

IT技術の発達により、一度に多くの情報を多くの人に素早く送ることが可能となった。一方で情報を受ける側は、波寄せてあふれてくる資料に困惑している状態である。配信された情報をパソコンの中でうまく整理して、必要なときに必要なところだけ素早く取り出せる工夫ができると良いが、私の場合は今のところそのすべがない。アナログ時代なら、冊子を本棚や保管庫に分類して並べ、必要なページに付せんを付けておいて、視覚的に容易に取り出すことができた。今後は、AI技術の進歩により、パソコンあるいはcloud上で、配信されてきた情報が自動的に仕分けされ、整理されていくようなシステムができるかもしれない。ついでに自分にとって必要な

ところだけを抜き出しておいて欲しい。早くそうなることを望む。

さて、最近しばしばDX (Digital Transformation) という言葉を耳にする。インターネットで調べるといろいろな定義が出てくるが、平たく言えば「データとデジタル技術を活用して、社会全体を良い方向に変化させる、世の中を便利にする。」ということである。

医療界においては、厚生労働省が9月22日に「医療DX令和ビジョン2030」厚生労働省推進チームの初会合を開いている。国が進めている医療DXは、保健・医療・介護の各段階において発生する情報やデータの共通化・標準化などにより、国民がより良質な医療やケアを受けられるように、社会や生活の形を変えようというものである。その一環として、オンライン資格確認システムのネットワークの拡充、レセプト・特定健診情報、予防接種、電子処方箋情報、電子カルテ等の医療情報をクラウド型の全国的なプラットフォームを構築してデータを共有しようとするものであり、電子カルテの仕様の統一化も考えられている。

新型コロナウイルス感染への対応での問題点をきっかけに、医療DXの推進にさらに拍車がかかったようだ。例えば、発生届のHER-SYSでの登録もその一つで、FAXで送られてきた内容を保健所が手作業で国のシステムに登録するという非効率な方法を改め、感染者、住民へのサービスの人手を確保しようとするものであった。また、電子カルテ情報を共有化することにより、健康診断情報、アレルギー歴や禁忌薬の確認など医療安全面での活用や診療の効率化等も期待されている。

最近話題になっているオンライン資格確認の義務化については、当初には導入は義務ではないとされていたものが、療養担当規則等が改正され、令和5年4月1日から、「患者がマイナンバーカードを健康保険証として利用するオンライン資格確認による確認を求めた場合は、オンライン資格確認によって受給資格の確認を行わなければならない（現在紙レセプトでの請求が認められている保険医療機関・保険薬局を除く）」とされたことから困惑が広がった。オンライン資格確認ができていない場合は、療養担当規則違反となって保険医療機関の指定取り消しとなるのかという質問まで出ている（指導の対象にはなるかもしれない）。さらに、2023年1月からはオンライン資格確認の基盤を使用した電子処方箋の運用開始も予定されている。機器の準備や医師資格証の取得など、医療機関側がまたいろいろな負担を強い

られることになるが、医療DXの推進は国としてはかなり本気で待ったなしのようである。

孤独で、情報が過多の中、どこまでついていけるかいささか不安ではあるが、時代に乗り遅れないように耐えていきたいと思う。